

小規模大学図書館の特性を活かした学生との協働による学びのコミュニティ形成
－読書ボランティア養成を通じた学生の読書環境の充実:事例研究－
研究成果報告書

Student Learning Collaboration by Community Formation and use of Small University Library
-A case Study on substantiality of the Reading Environment of Students through
the Reading Volunteer Training-

Results of research report

長崎ウエスレヤン大学附属図書館 植松久子

Hisako Uematsu
Nagasaki Wesleyan University Library

目次

はじめに

1. 長崎ウエスレヤン大学図書館における学習支援機能の現状と課題—大学図書館利用意識調査結果から—
 - (1) 長崎ウエスレヤン大学附属図書館の現況
 - (2) 大学図書館利用意識調査の結果概要
 - (3) 課題と改善の方向性

 2. 先進校事例調査—大学図書館における学習支援機能強化に注目して—
 - (1) 大学教育の変化と大学図書館
 - (2) 先進校事例調査
 - ・ 調査の視点
 - ①東京女子大学における取り組み
 - ②フェリス女学院大学における取り組み
 - (3) 学習支援環境の基盤としての大学図書館に求められる課題・方向性
-
3. 学生との協働による学生の読書環境の充実への取り組み実践報告
 - (1) プログラム開発
 - (2) ぶっく倶楽部との協働による取り組み実践報告
 - (3) 課題と改善の方向性

おわりに

大学図書館と学生との協働による「学びのコミュニティ形成」

1. 本研究により明らかになった課題と可能性
2. 大学図書館と学生との協働による「学びのコミュニティ形成」
3. 残された研究課題

はじめに

本研究の目的は、ユニバーサルアクセス期における大学図書館に求められる学習支援機能の充実の基盤形成モデルとして、学生の読書支援ボランティア養成を中心とする「学びのコミュニティ形成」プログラムを開発することにある。

長崎ウエスレヤン大学がこのような取組みを行う背景には、開学してからの学生の読書及び図書館利用率が低迷していることにある。デジタルネットワーク社会の到来で「不読者」が多数を占め、大学生も例外ではない。大学の大衆化が叫ばれ全入時代となり、また同時に視覚世代の登場により、いわゆる紙媒体の「読書」は苦戦を強いられている。また、図書館利用の減少の要因のひとつとして考えられるのは、ユニバーサルアクセス期における地方小規模大学図書館にあって、学力による選抜試験を経ない入学生が過半数を占めるなかで、読書の習慣づけが十分になされていない学生が大半だということである。

加えて昨今の大学生の学力の不均衡は、「学力の多様化」¹という言い換えもできる。大学設置基準の大綱化以来、入学者の多様化された学力が問題になっている。この多様化された学士の力の基盤となる基礎学力の面でも、読書の習慣づけは学習支援の喫緊の課題となっている。もはや大学図書館は、文献検索や蔵書の保管だけの場ではない。多種多様なサービスが求められているが、地方の小規模大学図書館においては、利用者サービスの幅が限定されてくる。ただ、小規模大学の特性を活かした利用者サービスもあるのではないかと考える。小規模大学である長崎ウエスレヤン大学図書館が、学習支援機能の充実の基盤形成モデルとして、学生の読書支援ボランティア養成を中心とする「学びのコミュニティ形成」のプログラムの開発を目的とした本学独自の事例研究を試みる。

1.長崎ウエスレヤン大学図書館における学習支援機能の現状と課題—大学図書館利用意識調査結果から—

(1) 長崎ウエスレヤン大学附属図書館の現況

長崎ウエスレヤン大学は、それまであった長崎ウエスレヤン短期大学を改組転換して、新たに現代社会学部福祉コミュニティ学科の1学部 1 学科で構成する四年制大学として 2002(平成 14)年 4 月に開学した。母体の鎮西学院は、米国のキリスト教宣教師 C.S.ロング博士が、1881 年(明治 14)年に長崎市東山手に設立したカブリー英和学校に始まる。同校は、キリスト教信仰に基づく人格教育を標榜し、長崎県における男子中等教育の中核を担うとともに、ミッションスクールとして全国に名を轟かせた。本学の名称「ウエスレヤン」は、メソジスト教会の創始者ジョン・ウエスレー

¹ 土持ゲーリー法一 読売新聞

にちなんでおり、ウエスレヤンとは、ジョン・ウエスレーの教えを受け継ぐものをさす言葉である。²

現代社会福祉学部の単科大学としてスタートしたが、2005年には、現代社会学部の福祉コミュニティ学科を募集停止し、新たに3学科(国際交流学科、社会福祉学科、地域づくり学科)を設置、2010年には、地域づくり学科を改組し、経済政策学科を新設した。

地理的には、長崎県の中央にあたる人口15万人弱の小さな都市に位置する。学生数429名、年間受入図書は、ここ数年約1,200冊程度、蔵書数は約5万7千冊の地方小規模大学図書館である(2010年5月1日現在)。

「沿革」

我々大学附属図書館は、四年制大学の開学に伴い、これまで二つの教室を改造した短大図書室(蔵書数約36,462冊、床面積262.9㎡2001年3月)、スタッフも1名から2名に増員したのを経て、「長崎ウエスレヤン大学附属図書館」(蔵書数約46,475冊、床面積530.8㎡2002年5月)になり来年度で10周年を迎えるが、図書館スタッフは2名のままであり、図書館利用が期待ほど増加しているわけではない。学生たちの資質の変化や社会の変化もあるだろうが、図書の管理に徹する余り、これまでに学生たちが積極的に読書(課題図書も含め)をする機会を逸してきた。本学は小規模大学であり、図書館の規模もまた外来者に「書斎のような図書館」と評されたことがあるほどである。機能性だけを重視した図書館で、書誌データを電子情報化しOPACで検索できることになり、図書館スタッフもその点のみを強調してきた。学生たちは、課題の図書さえあればよい、ないなら諦めるといった程度で、卒業間際まで図書館を利用したことがないという学生も多数存在した。図書館スタッフでさえも、本学学生の図書館に関する期待度はその程度だと考えていた。

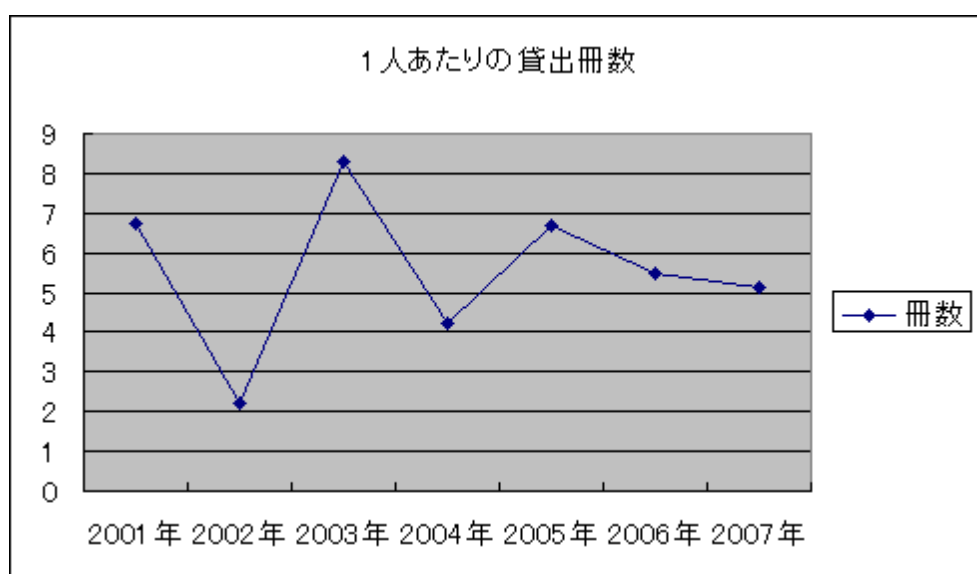
小規模大学図書館としては、財政的な制約により、設備の整備は難しくとも、サービスの整備充実はしていこうという基本的なスタンスにたって運営してきた。

近年、若年層の活字離れの結果、図書館利用者数の減少が一般化しているなかで、本学図書館もまた、同様の傾向にある。ここ数年の学生一人当たりの年間図書貸し出し冊数は、5~6冊程度となっている。大学図書館の年間貸し出し冊数の全国平均が8.6冊(2008年)となっているのに比して、本学学生の図書館利用の状況は、著しく低いといわざるを得ない。

² 長崎ウエスレヤン大学自己点検評価報告書2008

一人当たりの貸出冊数は、短大時代から以下のように変化してきている(2008年調査)

	短大時代		↓大学開学					
年度	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
冊数	6.35	6.73	2.23	8.28	4.24	6.69	5.47	5.13



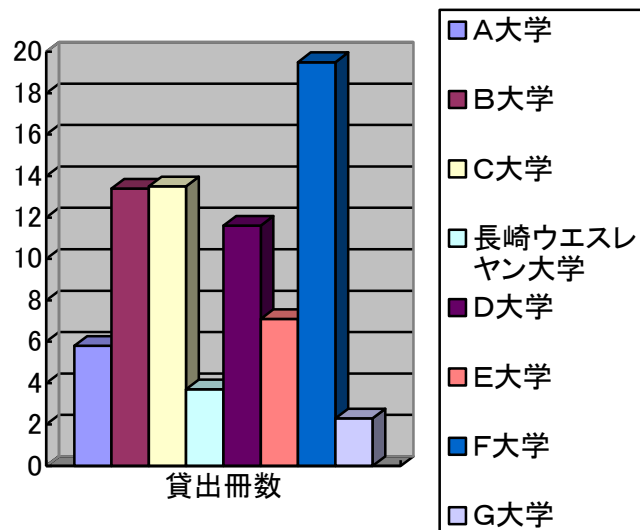
実際、長崎県のお他大学図書館と貸出冊数を比較してみると、本学は県内8大学のうち7位であった。1位のF大学は、19.5冊である。そこで何が見えてくるだろうか。

本学は、短期大学時代にも貸出冊数を上げるための努力をしたことがある。結果的に冊数が伸びているところを見ると、いかに個々のお薦めつまり、学生とのコミュニケーションが大事だということがわかる。カウンターでの一見無駄なおしゃべりが話題の本や興味がある事柄から、授業で困っていることの相談になり、本の推薦ということに繋がっていくことの意義は大きいと考えられる。

長崎県内大学図書館貸出冊数比較表(2010年版)

図 1

大学名	貸出冊数
A大学	5.8
B大学	13.4
C大学	13.5
長崎ウエスレヤン大学	3.7
D大学	11.6
E大学	7.1
F大学	19.5
G大学	2.3
★東京女子大学	14.7
★フェリス女学院大学	18.5



★ちなみに視察した大学の貸出冊数も並べてみた。

圧倒的な数字に驚く。だが、東女大は貸出冊数には重点を置いていないという回答であった。

ここで、貸出冊数が多い F 大学や C 大学であるが、特に読書啓蒙活動をしているといった話は聞かない。学生との協働は特になにもしていないという大学でも、貸出冊数は比較的多い。学生の質といってしまうとそれまでだが、読書する学生と、まったく読書しない学生の二極化が進んでいる現実では、読書する傾向の学生が偶然にも集まっただけという状況は考えにくい。図書館主体の活動のみではなく、学科との連携や研究課題図書への提示等、図書館以外の働きかけということも当然考えられる。

D 大学の学生数は、ほぼ本学と同規模であるが、しかし、同大学の受入冊数は本学の年間 1,311 冊に比べ、3,080 冊と 3 倍近く、貸出冊数も 3.1 倍である。この違いは何であろうか？ 現地聞き取り調査を行った結果、貸出冊数が多い原因は、学科から提示される課題図書が多いこと、テキストを購入しているのも、その利用が多いことだと説明された。本学は、テキスト類を原則として図書館で購入しない。大学毎に、収集規定が異なっているということだろう。

立派な施設を持ち、図書館スタッフも本学よりは多く、専任職員 2 名、派遣職員 2 名という体制である。スタッフの数の違いは、館内のあらゆる所で証明されていて、サインひとつをとっても参考になることばかりであった。

また、同行した学生たちは、英語版の絵本の展示がいたく気に入ったようで、本学にも是非取り入れて欲しいという意見が大多数を占めた。D 大学は、外国語の習得を目的とした大学であり、大きな特徴として、留学生数が全体の学生の 45% を占めている。学部学科の専攻分野により、テキスト・資料を蔵書として算入しており、一概に本学との比較はできないが、貸出冊数の差異はとて大きい。

《学習支援機能強化に向けたこれまでの取組み》

これまで見てきたとおり、本学の貸出冊数は県内大学において低位であるが、前述したようにサービスの充実を心がけている。特に近年は、以下に簡単に紹介するとおり、①ゼミとの連携による「図書館ツアー」の実施 ②図書館利用促進のための情報発信 ③地域に開かれた図書館づくりに取り組んできた。

① ゼミとの連携による「図書館ツアー」の実施-学生アシスタント(以下SA)の登用

2007年度より、4月～7月にかけて、演習クラスと連携して「図書館ツアー」を実施している。基礎演習や専門演習の授業の中で、文献検索をはじめとする図書館活用法をレクチャーする。30分から50分であったが、学生たちが中々集中しないし、質問も出てこず、ただ、受身となって机に座っているだけであった。利用指導をしているわけだが、図書館側の一方的な思い込みで実施しているの、学生たちのポイントと微妙にずれていたのであろう。その受け手の心理が何となくこちらにも伝わってきた。学生が必要としている情報は何か、して欲しい指導は何かということ逆の立場で考えようと図書館サポートサークル「ぶっく倶楽部」の学生に協力を依頼した。時間に余裕のある学生に、図書館ツアーのことを話してみると、科目として教職課程を履修する学生たちから積極的な参加があり、効果的な利用指導をすることができた。また、実験的に、時間に余裕がある学生にサポートしてもらったところ、学生に好評であった。2007年度の図書館ツアーの感想は、図-2の通りである。

2008年度からは、利用指導に学生をSA(Student Assistant)として登用している。この頃は、図書館検定なる問題を図書館スタッフで考え、ツアーの最後に全員で受験してもらい、成績上位者には景品を渡すなど遊び心満載だったが、近年は時間的余裕も無くなり中止している。

2007年時の図書館ツアーを受けた感想(117名受講) 図-2

図書館ツアーを受けての感想	件数
図書館全体のことがよくわかった	33
今まで利用の仕方がわからなかったが、本を借りてみたい(活用したい)。	31
初めてパソコンで検索した。できるようになったのでよかった	17
図書館ドラマのおかげで図書館のルールがわかり易く知ることができた。	17
図書館ドラマが面白かった。ぶっく倶楽部の楽しそうな様子が伝わった。	10
本(読書)に興味をもった。	8
そのほか(図書館活用法についての感想など)	1

SAによる図書館ツアーの様子



2010年度の例をあげると

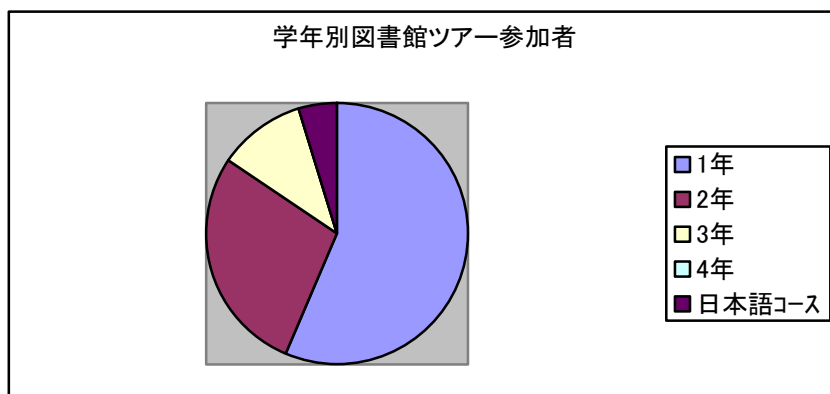
実施期間 2010年4月19日～7月2日
 実施時間 16:30～18:00(基本的に基礎演習の時間を充てた)
 参加総数 149名(全体の35%)

今年度より、本学では全体に低迷する就職率を補強するため、全学的にキャリア教育に力を入れた。そのため、例年、図書館ツアーに充てられた時間数が減り、昨年よりもツアー参加者数は減少した。SAの登用ということで、図書館のモチベーションは上がっていたのだが、教員への図書館側のアピール不足というのは、反省すべき点である。

図 2

2010年度図書館ツアー参加者数

学年	1年	2年	3年	4年	日本語コース
受講人数	84	42	16	0	7



<指導内容>

- 1年生対象・・・図書の分類(NDC分類)と配架の状況
OPACを触ってみよう。図書館内の案内と各種サービスの説明(図書館ドラマ上映)
キーワード検索(図書館で用意した語彙検索)
- 2年生対象・・・レポートの作成について。文献の検索法。便利なサイト
OPACを使用しての文献検索。文献複写サービスについて。
- 3. 4年生対象・・・卒論の文献検索の方法について。紀要・学術雑誌の利用
検索サイトの紹介。相互貸借や文献複写サービスの利用促進。

②図書館利用促進のための情報発信

・学生との共同による図書館ガイドDVDの制作

図書館をサポートするぶっく倶楽部の学生たちと共同で、デジタル機器による図書館紹介をした。マンネリ化している入学後のオリエンテーションで視覚的な刺激を与えることが重要だと考え、「図書館入門」といったDVDを制作し、上映した。これは年々手法が凝ってきて、近年ではドラマ仕立てになっている。学生たちが脚本を書き、カメラを回した。出演者もすべて本学学生なので、興味を引く出来映えとなった。また、撮影中は教員も飛入りで参加し、全学的な試みとなり繰り返し上映された。このDVDは、また、図書館ツアーで上映され、特に、学生たちの図書館への興味を掻き立てたことの功績が大きい。

・教職員によるブックガイド「と。」の発行

2003年より毎年発行している。学科で学ぶ意味や専門科目の関連で読んで欲しい本の列挙などを記した、文字通り図書館利用のガイド本である。近年の内容は、図書館活用法、インターネットの検索サイトの紹介、大学周辺の地図、スケジュールなど多岐にわたっているが、学生目線で常に携帯して使えるよう工夫されている。実際、スケジュール手帳代わりにブックガイドを利用していった学生もいる。図書館スタッフが編集しているが、学生の手稿も反映されているし、挿絵等も学生に依頼する。

・館内配置や学生手作りのPOP

館内にぶっく倶楽部学生の手作りのPOPが、各閲覧席に配置してある。各自が読み終えた本の紹介をしている。司書ではなく、学生たちが読んだものなので、手に取りやすいのか、実によく他の学生たちも見ているようだ。



閲覧席に置かれたPOP

また、「セレクトショップ」と名づけている書架がある。これは、SAの学生たちと図書館スタッフが一緒に、今読んで欲しい本を各自でセレクトして、それを配架しているが、前期後期で入替えるようにしている。



これらも、探すのが面倒くさい学生や、とりあえず読書といった学生たちには、好評である。

③地域に開かれた図書館づくり

2002年の大学開学以来、地域との連携も活発となった。長崎県央地域に唯一の大学機関なので、市民の関心も高い。2002年6月29日に、大学図書館の披露を兼ねて市民団体「びぶりの会」と共同で開催したジャズコンサートは、当時の諫早市長や学長も駆けつけ、なおかつ当時の図書館長自らが市民とバンドを組み出演した、名実ともに市民との共演であった。300席あるホールが満席となったのである。

また、開学当初から「諫早図書館利用者団体連絡協議会」(以下、図連協と表記)に加盟しており、年1回、諫早市立諫早図書館全館で実施する「諫早としょかんフェスティバル」という市民イベントには、展示や講座など、多くのぶっく倶楽部の学生が参加してきた。このイベントには毎年1,000人ほどの市民の参加がある。

この中で、本学と図連協とは、良好な関係が構築されてきた。今後も、諫早市立図書館とは、

密接に連携していきたいと考えているが、新たに 2011 年 4 月より『ビジネス情報支援図書館懇話会』との協力体制も構築しようとしている。

この学外のイベント参加は、学生のキャリア形成の場としても捉えている。大学図書館は電子化され、コンビニ方式で何も言わずとも本の貸出・返却ができ、電子メールで思いを伝え、学生たちはすべてにおいて、コミュニケーション不足である。自分たちで考え行動することは、現代の若者が最も苦手としていることだ。図書館の知識はあっても、実働が伴わない。この、「としょかんフェスティバル」は、主にバイタリティ溢れる主婦層が中心となった市民団体と市の図書館職員とで構成されている。活動的な市民団体との交流は、別の意味で生きた学習の場となっている。

本学図書館サービスのひとつとして、公共図書館で借りてきた本を、大学図書館のカウンターで返却できる。本学は、街中より少し高台にあるので、公共図書館で借りてきた本を、大学図書館で返却できるということは、学生たちには好評のサービスである。ただ、これは本学職員が代行で返却に行っているため、今後公共図書館との連携を取る上で整備する必要がある。

市民開放プログラムとしての「朗読講座」を開講した。当初は、本学教職員と学生も参加し、朗読会として開催したが、市民からの要望に応える形で、朗読講座とした。この講座は、2005 年から 3 年間続いた後、本学から独立する形で、朗読ボランティア団体として現在も活発に活動されている。

他にも様々なコンサートを「やすらぎコンサート」として開催し、地域開放を実現した。

以上のように、多様な取り組みを行ってきた。こうしたサービスの充実にも関わらず、利用状況が上昇しないのは何故なんだろうか？

(2) 大学図書館利用意識調査の結果概要

小規模大学である本学の学生に対し、質問紙により調査を行い小規模大学図書館のメリット・デメリットを明らかにし、学生生活支援や学習支援、論文作成指導における支援方法など、今後の大学教育に必要な図書館のあり方を考える布石にしたいと考えた。

調査対象は、本学 1 年生を中心に各学年のゼミクラスの担当教員に依頼した。調査用紙は、1 年生を中心とした本学学生（留学生を除く）のうち、図書館ツアーを受講した学生 120 人に配布した。

調査時期は、図書館ツアー時期とし、4 月～6 月までの期間とした。全クラスが図書館ツアーを受講するわけではないので、受講したクラス（日本語がまだ不自由な留学生は除く）とそれ以外のクラスの教員にも協力を依頼した。得られた調査票は、外部に触れない状態で保管し個人が特定されないよう配慮した。設問には十分な時間をとり、主旨を明記し、了承を得られた学生から有効回答 86 枚を得た。

この調査を実施して、初めて本学の図書館利用者像が見えたことになり、大学図書館としての最初の 1 歩を踏み出したと考えられる。

生活の中に読書習慣があるのかどうかなど、学生の生活スタイルから、読書意識、図書館利用状況と図書館利用に対する意識及び小規模大学について質問し、単純集計を行った。ただ、この調査の項目で未記入者が62%(調査結果42図)ということは、きちんとした分析ができないことである。

しかし、この小規模ということが、学びのコミュニティを形成する上で、有利に働くのではないかと考えている。少人数であることは、連絡が密でありスピーディであり、非常に効率がよい。「血」の結束イコール「知」の結束なのである。

また生活スタイルも含めて、学生の生活現状が把握できた。例えば小遣いの殆どを携帯電話の使用料に充て、本に費やす金額は月に雑誌一冊買う程度であること、社会情勢を受けてアルバイトをしている学生が65.1%おり(8-1図)、勤労時間は持平均で週に3~4時間(9-1図)、得た収入は3万円以上と回答した学生が44.2%いた(10-1図)。調査項目の収入設定が低すぎたのは反省点のひとつである。アルバイトをしている学生がこれほど多いとは認識不足であった。得た収入も生活費を得るためという回答が多かったようだ。ここで、生活に追われる大学生活というイメージが浮かび上がる。

つまりは「読書」する心の余裕がないのかとも考えられる。図書館利用の低迷に、「読書」への興味がない、あるいは持てない学生たちが多く存在するということは、決して無関係ではない。

イベント開催にしても、日程が合わない学生が多く、その理由とはアルバイトであるということがわかる(37-1図)。大学のイベントに参加するよりも、アルバイトをして生活費を稼ぐ方を選ぶのはいかにも今風の学生像であるといえる。

読書にさほど興味はなく、小説はさほど読まないが漫画は非常に読むこともわかった(23図)。小説を読んだことがある学生が73%(22-1図)、漫画を読んだことがあるが87%(23図)、読みやすさについては小説が60%(22-4図)、漫画が88%(24-1図)と圧倒的に漫画が好まれているという残念な結果であるが、意外に小説を読んでいるという感想をもった(21図)。

平日・休日含めて、読書をしない学生が38%(13図、14図)もいる。テレビを見ない学生は12%(15図、16図)、インターネットをしない学生は20%(19図、20図)で、最近の傾向で携帯小説を読んだことがある学生が38%(25図)おり、電子メディアへの関心が高いことが伺える。

最近の学生は字を読むことよりも視覚的に認識することが多く、以前より、ポスター掲示やイベント案内にはイラストを多用しているが、図書館の広報戦略としても全国的にこのような傾向が伺える。

これまでの取り組みを学内向けの図書館広報として、熱心に活動しているつもりであったが、あくまでもそれは自己評価であり、こうして実際に利用調査をしてみると、約64%(47図)の学生が図書館の配置ですら把握できていないことがわかった。

その問題解決の突破口としては「親しみやすい」「本を探しやすい」(43-1、2、3、4図)である。大きな施設は魅力的であるけれども、膨大な資料は整理が煩雑、スタッフの対応も事務的になりがちである。反面、「書齋みたいな図書館」である本学の図書館は、そういう面では有利に働くの

ではないか。

ただし、調査項目で「小規模大学図書館でよかったと思う理由」で未記入が 62%(42 図)あったことは、重く受け止めなければならない。

①本学のこれまで開催してきた図書館イベントについて、在学生を対象に調査したが、イベントへの参加率はとても低い。図書館広報が戦略としてうまく機能していない結果である。年間数多くのイベントを企画してきたが、ぶっく倶楽部限定のイベントだと理解され、全体の参加者が低迷した原因だと考えられる。参加しない理由について問うと、日程があわないと回答した学生が 31%(37-1 図)いた。イベント参加率は、日程調整で左右されると言っても過言ではない。

②大学図書館の利用状況では、大学全体の取組みである「入学前学習プログラム」³で図書館を利用した学生が 37%(38 図)いた。入学前に大学より資料が配布され、各学科ごとに読むべき本のリストが提示されている。

これらのことから課題として再考しなければならないのは、学生たちの読書意識の希薄さである。なぜ読書しなければならないのか、必要なのかということを再度確認しなければならない。また、本学図書館のイベントについても、図書館利用と直接的に結びついていない点もある。単にレクリエーション的なイベントで完結している。それが学生の図書館に対するニーズでないという点で、学生の参加率が低いままであると考えられる。つまり、学生と図書館のニーズギャップが生まれており、学内との連携も潤滑でないということが窺える。

また、①②からわかるように、図書館だけの単独企画では、参加者が少ない。全学的なプログラムとして位置づける必要がある。

(3) 課題と改善の方向性

調査の結果、学生たちに「読書」の可能性が感じられた。今さら「読書」であるが、同時に「読書」から「学び」へ繋がっていくことのプロセスを楽しむこと、つまり、「読書」のきっかけさえあればいつでも始められるということだ。「考える」ということは大学教育で、最も求められていることだ。そして入学後の学生たちは、突然目の前に「考える」ことを突きつけられるのである。

本学は、短期大学時代にも貸出冊数を上げるための努力をしたことがある。結果的に冊数が伸びているところを見ると、いかに個々のお薦めつまり、学生とのコミュニケーションが大事だということがわかる。カウンターでの一見無駄なおしゃべりが話題の本や興味がある事柄から、授業で困っていることの相談になり、本の推薦ということに繋がっていくことの意義は大きいと考えられる。常日頃の学生たちを見ていると、図書館にあまり興味がないのかと思っていたが、D大学見学のときの学生たちの目の輝きは驚くほどであった。日常と違うシチュエーションには、相当興味を持って取り組む事がわかり、今後の「図書館活動への力」＝「図書館力」となっていくことは間違いない。

³ 2005 年からの長崎ウエスレヤン大学全体の取組み。

また、初年次教育ということで、学力に問題のある学生が出現してきた。こういう学生は、新聞や雑誌・本を読む習慣がなく、学習意欲も低いという。オリエンテーションでは、特に雑誌・新聞を読むよう指導しているが、図書館に足を運ばない学生が多くなってきている今、それも難しい。

今や学生たちは図書館に足を運ばない。インターネットの普及により、学術情報流通の電子化で直接必要な情報は簡単に手に入る。面倒なコミュニケーションを介さずとも、居乍らにして、情報を得ることができるのであるから、図書館には資料を求めに来ないはずだ。「誰も来ない図書館」という土屋俊氏の論文は、閑散とした図書館をむしろ電子化された情報の時代における図書館の理想的形態であると言うべきであろうと断言している。⁴ かとって、e-learning の整備は、まだまだ遅れているので、図書館がまったく不要になるというわけでもないという土屋氏の言葉に安堵しながらも、情報化の波に乗れない地方の小規模図書館は、時代の流れに逆らったサービスがあるのではないかと考える。

これまでのぶっく倶楽部のアクティビティは、図書館へ学生が集うためにレクリエーション的な手段を用いていたが、本来の大学図書館機能である学習支援に重きをおいて進めていかねばならない。図書館ツアーへの「ぶっく倶楽部」学生の登用の有効性から、学生同士が学び合うきっかけの創出、読書を通じてそうしたきっかけを作り出す仕掛けが必要である。そのためのプログラムを開発し、今後の図書館利用促進へシフトしていく。

2.先進校事例調査—大学図書館における学習支援機能強化に注目して—

(1)大学教育の変化と大学図書館

大学改革が進む中、大学図書館は単に文献検索等の学術基盤にとどまらず、「学習支援・教育基盤」としての機能を求められつつある。

時代の潮流は、「学生たちの主体的な学習をサポートする」図書館である。これまでの大学図書館機能として論じられてきた資料収集・保管、文献検索とまた違う側面で、学習支援機能が求められているのである。

昨今、大学の教育プログラムと連動した大学図書館の動きが、注目を集めている。例えば、明治大学図書館の「教育の場として図書館の積極的な活用」、東京女子大学の「マイライフ・マイライブラリー」、お茶の水女子大学の「科学的思考力と表現力で築く私の履歴書」などがある。こうした取り組みからわかることは、図書館自身が受身ではなく、むしろ能動的に大学全体に働きかけを行っていることである。これまでの資料の収集や保管といった、言わば「後方支援」の立場から、学習を支援・促進する環境基盤としての機能へと変化しているのである。

⁴ 丸善ライブラリーニュース

大学図書館が果たすべき学習支援機能とはどのようなものであろうか。平成 20 年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」では、汎用的技能として、「コミュニケーション・スキル」、「情報リテラシー」といった項目などがあげられている。⁵こうした汎用的機能とはまさに「読書力」であり、そして、大学図書館が担うべき学習支援のひとつが、日本語の読み書き能力即ち「読書力」の養成と言ってよいだろう。

これまで、学校図書館でこそ論じられてきたが、大学図書館で「読書」という言葉は使われなかった。あくまで学習・研究支援の段階で使われてきたにすぎない。

・ラーニング・コモンズ

ラーニング・コモンズは、2005 年ごろから米国・英国の大学図書館で始まり、「知識創出の場としての図書館」として、日本国内の大学でも注目度は高い。資料収集管理・文献検索型図書館から、学習を促進・支援するような環境づくりを目指すようになった。

インフォメーション・コモンズ(図書館職員指導型)からラーニング・コモンズ(他の組織と協働で行う学習支援)へと変換しつつある。このことは、日本で初めてラーニング・コモンズを紹介した米澤誠氏の論文では、以下のように述べている。

コモンズとは、「共有資源」「公共の場」を意味する言葉であり、インフォメーション・コモンズは、デジタル時代の情報資源を利用するための公共資源・公共の場として誕生したものである。—中略— インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへの転換は、学部教育の新たなパラダイム転換、すなわち学習理論が『知識の伝達』から『知識の創出・自主的学習』に移行したことを反映したものである。

図書館は、授業で教員から教わるといった知識の理解を深めるための場所・資料を提供するだけでは不十分となっている。学生が自主的に問題解決を行い、自分の知見を加えて発信するという学習活動全般を支援するための施設とサービス・資料を提供する必要があるということなのである。⁶

また、インフォメーション・コモンズが誕生してから約 10 年目には、ラーニング・コモンズへ」というテーマ設定のセッションが、ミネソタ州ミネアポリスで開催された第 12 回 ACRL 全国会議⁷で行われたとある。この展開になった原因は、ウェブ化が非常に早いスピードで進化し、図書館の利用対象者が研究者や大学院生ではなく(彼らは研究室環境で充足できるようになった)、学部学生に絞られたからではないかと米澤氏は推測しており、図書館は資料提供と場所の提供だけでは、不十分であると言う。

ここでも学生主体の問題解決とそれを支援する施設・サービスが不可欠だということである。

⁵ 平成 20 年中央教育審議会答申

⁶ カレントアウェアネス 289 2006 年 9 月

一方、井上真琴氏は、

昨今、データベースやインターネットで電子情報源が簡単に入手できることから、図書館は非来館型サービスに力を注ぐことに偏重しがちであった。このことへの反省を踏まえて登場してきたのが、1990年代に米国やカナダで先行導入された大学図書館のラーニング・commons(インフォメーション・commons、ナレッジ・commons等の呼称もあり)である。これは、「場」としての図書館、「知的創造空間」としての図書館を取り戻そうとする動きの中から生まれた、文字通り、学ぶために皆が集う共通の場所(=commons)を、図書館に開設して運営するものである。⁸

と述べている。

2010年9月、西南学院大学で開催された私立大学図書館協会総会・研究大会において、ラーニング・commonsについての井上真琴氏(同志社大学企画課長)と米澤誠氏の講演があった。

井上氏によると、実際はラーニング・commonsの設備をすでにもっているにも関わらず、そういう認識がなかったということで、最初にラーニング・commonsの名を冠したのは、お茶の水女子大学であったということであった。それが2007年のことで、非常に新しい取り組みである。

電子情報の出現により、図書館利用者の減少、また青少年の活字離れという危機感が、このような図書館の新しい取り組みを生み出したのである。

そして、これからの大学図書館は、こういうサービスにも取り組んでいかなければならないのである。

ただ、ラーニング・commonsは、これまでの大学図書館の設備を、学生の学習スタイルに合わせて整備しなければならず、資金不足の小規模大学図書館では、簡単に着手できるものではない。総会講演時の井上氏のつぶやきが妙に残る。

「実際にラーニング・commonsを開設して運営しようと思ったら、普通のやり方では簡単につくれません」井上氏談⁹

「普通のやり方ではできない」、これは小規模大学にとって、ピンチでもありチャンスでもある。小規模ゆえにスピーディに動けることは重要なポイントである。多様な他大学のラーニング・commonsを参考にし、本学独自の学びのコミュニティ形成へとつなげていきたい。明るい未来が広がっていると信じたい。

⁸ IDE2009年5月号 井上真琴

⁹ 私立大学図書館協会総会 2010年9月

・学生との協働

近年、どこの大学図書館も学生の選書ツアーを実施している大学が多い。まさに、学生自身が自分たちで読む本を選定するので、図書館の利用率もあがるだろうという目論見であるが、これがそのまま推薦図書となって、実際かなりの効果を上げている。当然、図書館には収集規定があるので、それに則っての選定となる。このような取組みのほかにも、学生と協働する場面は多くなっている。

(2) 先進校事例調査

〈調査の視点〉

今回の研究助成受託にあたり、ラーニング・コモンズと学生との協働による読書力養成の取組みの観点から、先進事例として2大学の図書館視察を実施し、インタビューを行った。

ひとつは、学生支援GPに選定された東京女子大学図書館、もうひとつは、横浜フェリス女学院大学図書館である。

両大学の選定理由は、ひとつには小規模大学であることと、読書プロジェクトという「読書力」に特化した取組みを実施している横浜フェリス女学院大と、小規模と呼べないかもしれないが、学習支援の新しい形であるラーニング・コモンズを、全学を上げて取り組んでいる東京女子大学ということになる。

① 東京女子大学における取組み

北米プロテスタント諸教派の援助のもと、新渡戸稲造を学長として1918年(大正7年)に設立した。2009年度(平成21年度)に2学部を改組し現代教養学部を設置。

学生数は4,281名(2009年5月1日現在) 受入図書 8,579冊

蔵書数 476,667冊 貸出冊数/学生 14.7冊 (2008年実績)といった中規模大学図書館といえる。¹⁰

東京女子大学図書館(以下東女大と表記)は、「マイライフ・マイライブラリー」-学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラム-(文部科学省の「平成19年度 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)」)に選定され、2007年度に大幅な改修を行い、滞在型図書館を目指して総合図書館に生まれ変わった。改修する際には、建物の骨格にはまったく手を加えることなく、中の配置を触っただけだとのことであったが、そこには素晴らしい学習空間が広がっていた。また、年間数十件の大学関係者の見学があるというのは納得の事実である。極めて先駆的な大学図書館である。

¹⁰ 大学ランキング 2011 版

飲食可能なりフレッシュルーム
多くの学生たちが集う



東京女子大学図書館外観



視察に赴いた日(7月15日)は、図書館は学生で溢れていた。当日、我々を出迎えて案内してくださった橋本春美課長に、試験前で学生が多いのか聞くと、「試験前だけでなく、利用学生の数は通常(授業期間中)でも多くなっている。」とのことだった。館内のメディアスペースでは、利用者が多いために入替制で対応しており、午後3時の入替時には、目視だけでも50名以上が列を作り、利用可能人数(48名)を大幅に超えており、今後2回の入替制が必要になるかもしれないということであった。また、貸出のみのPCも全22台すでに貸出中であるとのこと、その盛況振りが伺える。まさに東女大が目指す『滞在型図書館』を目の当たりにした。

東女大は、滞在型図書館によりキャリア構築力の育成も目指しており、学生ニーズに沿った改修をした結果、館長室や応接室をなくし、グループ閲覧室やプレゼンテーションルームを完備した。

飲食可能なりフレッシュルームなど、まさに多様な学習スタイルに沿った図書館づくりであり、学生たちが集うのも無理はない。学生ボランティアなどの役割を効果的に使っているのも特徴である。学習コンシェルジェという学習相談のための学生スタッフ(院生)もいた。当初はあまり利用がなかったが、2009年度からは格段に利用が多くなっているとのことであった。学習コンシェルジェ専用のカウンターも完備しており、いつでも対応が可能ないように整備されていた。学習コンシェルジェは、館長などから組織される委員会のメンバーによる面接を経て採用されるということであり、学習支援を行うのであるから、優秀な学生が担う。アルバイトという位置づけであり、時給も通常のスタッフよりは高給であった。

学生選書のPOP



翌年1月17日に開催された東女大図書館の「マイライフ・マイライブラリー」公開実績報告会にも、読書リーダーの学生を伴い参加してきた。この学生は、図書館ツアーに参加したときは、学べることは全て吸収していきたいという意気込みのもと、質問を積極的に行った。以下に、その公開実績報告会に参加した学生のレポートを掲載する。

現代社会学部 社会福祉学科 3年 濱田 敏徳

《東京女子大学「マイライフ・マイライブラリー」公開実績報告会に参加して》

1月17日に東京女子大学「マイライフ・マイライブラリー」公開実績報告会(以下、報告会と表記)に参加した。参加者は約160名、報告会は東京女子大学図書館の案内・紹介も兼ねた図書館ツアーとマイライフ・マイライブラリーの実績報告会というプログラムになっていた。

図書館ツアーでは学生サポーターの方が図書館ツアーのマニュアルを使い館内の案内や利用方法の説明してくれた。8部屋の個人ブースを始めとした個人学習スペースの充実はもちろん、本来図書館ではタブーとされてきた飲食やおしゃべりが許可されたスペースやガラス張りのプレゼンテーションルーム、約20台のレンタル可能なノートパソコンと50台ものデスクトップタイプのパソコン設備があるということにも驚かされた。学生の社会的成長を支援する滞在型図書館という名の通り夜遅くまで多くの学生が数多く残っていた。

実績報告会ではこの3年間の実績は学生のアンケート結果を元に作成されていた。アンケートの中で何が図書館利用において重要なのかという点で、図書館蔵書の館外貸出よりも館内利用の方に重点が置かれているということが分かった。またこのことからプログラム開始により1度は回復した図書の貸し出し冊数が翌年減少したのではないかとと思われる。

学生アシスタントを対象としたアンケート調査ではほぼ全員が学生アシスタントをやってみて良かったとのことだった。

学生アシスタントの方に「どうやったら学生が図書館を盛り上げることが出来ますか?」という質

問をしたところ、「私が楽しむことが大事」ということだった。全員が全員同じように考えているわけではないので、当然図書館に対しての想いはそれぞれ違う。だから少人数でもいいから、楽しんでいるんだということのアピールが必要で、自分の力でより良くしたいという気持ちが必要なのだとことを学んだ。

《所感》

今回の実績報告会を終えて、まず、東京女子大学図書館と本校の図書館とでは設備や蔵書量、また大学自体に規模も全く違うので、同じやり方が出来ないということが分かった。しかし学生スタッフを比較すると、東京女子大の仲間意識や一体感というものは、本学のアルバイト生を含むぶっく倶楽部(以下、ぶっくと表記)のメンバーも遜色ないように感じられたことから、今後メンバーのモチベーションを高めることが、よりよい図書館づくりにつながると感じた。ただ、東京女子大学のアルバイトがシステム化されているのは驚いた。

今後は定期的にぶっく倶楽部のメンバーが集まる機会を設け、図書館に対する所属意識や自分がやるんだ、変えていくんだという自意識をしっかりと持つようにしたい。

また学生同士の相互学習は筑波大学が行っている「春日ラーニングコモンズ」が該当するように感じた。学生主体の運営で上級生がチューターとなり空き教室を利用して活動を行っている。同級生のみではなく上級生や下級生との交流を持つ機会にもなっているようであるが、教員や図書館員が直接ラーニングコモンズに関わっていないことなどにより、大学全体に浸透しきっていないそうである。これもまた多くの改善点の残る活動ではあるそうだが、全ての活動を学生主体で行っているというのは魅力的である。

- ・ラーニングコモンズ…学生主体の活動、共有の場、ワークショップ
- ・ラーニングコモンズの3要素…場所、設備、人(学生スタッフ、教員、図書館、etc)

② フェリス女学院大学における取り組み

東女大図書館を視察した翌日、フェリス女学院大学図書館(以下フェリス女大と表記)を訪ねた。

フェリス女大の起源は、1870(明治 3)年のヘボン施療所での英語、漢文教育などにさかのぼる。1965(昭和 40)年に開学。97(平成 9)年に国際交流学部を設置。学生数 2,627 名(2009 年 5 月 1 日現在)受入図書 8,619 冊 蔵書冊数 293,728 冊 貸出冊数/学生 18.5 冊(2008 年実績)である¹¹

¹¹ 大学ランキング 2011 版

ブックエンドをうまく使ったPOP



東女大よりも小規模ながら、貸出冊数を上回っているのは、フェリス女大の読書プロジェクト¹²の成果の表れだと考えられる。東女大は、滞在型図書館の学習支援であるから、整然と勉強している学生の多さが印象的であったが、ここは、DVDを観たり読書したりして、学生たちなりの図書館ライフを楽しんでいるといった風情であった。

図書館から学生へのアピールとして効果的だと考えられるのは、「選書規程が比較的緩やかである」ということである。

それならば、学生たちも規定に縛られることなく、自由に選定できる。大学図書館には、選書から洩れそうな「ライトノベル」も、フェリス女大では、学生が選書したら受け入れているとのことであった。その点、フェリス女大はどこまでも学生目線に立っているである。

また、フェリス女大は、数々の図書館イベントを開催しているところが、非常に本学と相似している。

興味深かったのは教員の役割である。フェリス女大が読書プロジェクトをするきっかけとなったのは、教員たちの熱意であった。その積極的な、教員先導型で進められたプロジェクトは、学内の意思疎通や、学生とのコミュニケーションも円滑であったろうと憶測されるが、「いま、図書館に求められるもの」―フェリス女学院大学の挑戦―を読んでみると、中々の苦労があったことがわかる。その様子を著書の中で、以下のように著している。

「―サークルでもない講義でもない、新しい試みである読プロを三者(教員+学生+図書館)が運営する上で、双方の要望がかみ合わず、衝突することは必然的な課程だったのだろう―」。

13

¹² フェリス女学院大学図書館で始まった読海能力向上を目的とする運動である。

¹³ 「いま、学生に求められるもの」ひつじ書房刊 2009 フェリス女学院大学附属図書館

図書館スタッフも学生たちも教員も、誰ひとり欠けることなく熱意をもって臨んだという姿勢が見られ、好感が持てた。

学生選書の一例

読プロの掲示



(3) 学習支援環境の基盤としての大学図書館に求められる課題・方向性

今回の視察では、両大学のサービスのきめ細かさや、学生目線に立った取組みを見ることができた。どちらも女子大学らしいPOP作成や配置、レイアウトであった。特にブックエンドをうまく利用したPOP作りや、学生サポーターを段階的に配置するといった方法は参考になった。しかし、東京女子のような滞在型図書館にするには、施設設備的に課題がある。そのところをどうクリアしていくかが、今後の課題である。

さて、ここで小規模大学というのは、どのくらいの規模の大学を指しているのか。

IDE2009年10月号 井原が小規模大学の線引きを示唆している。そこでは、小規模大学を入学定員800人未満(学部収容定員3,200人未満)としている。また、平成20年度全国大学一覧では、全私立大学569校のうち、小規模大学は411校としている。この中の一校が本学なのであるが、小規模の枠組みの中でも下位の方だろう。定員は開学以来充足していない。

小規模大学である本学の個性・特色としては、小規模に伴う家族的集団であるということだ。

それぞれの大学職員が、学生と相互にわかりあえる距離にいる。スモールであるがゆえの相互連携がとりやすく、活動そのものの敏捷性に長けているのだ。小規模大学であることに期待されていることも、少人数教育とか一体感とかであるからして、小規模大学のあるべきプラス面を最大限に

活用していかなければならない。¹⁴

一方、大学図書館の運営費から検討してみる。現代の高等教育 2009 年 5 月号の巻頭言に、「大学図書館は教育研究の国際競争力を左右する中核施設として、大学経費の 2～3%で運営されている」と記述されている。本学の場合は、僅かに 1.3%であった。(平成 20 年度実績)

これは、大学全体の運営経費の中で図書館経費が占める割合を提示している。

小規模大学は、当然のことだが、大学規模に比例して予算規模も小規模である。よほど当該図書館に力がない限り、これが現実である。悲しいかな、経費削減の対象として筆頭に挙げられるのが図書館というセクションである。しかしながら、本学は図書館活動に一定の理解を示していただいており、運営費として予算を獲得している。これは大変有り難い事である。

ただ、小規模大学図書館は、資金量が少ないということをまず確認しておきたい。加えて、人的資源も同様である。本学の場合、図書館スタッフは2名でしかない。

茂出木理子は、以下のように書いている。

小規模な大学図書館が小規模だからこそその利点を生かし、図書館が主体となった協働の場に推進するには、1.図書館がやる気があることを学内にアピールすること、2.できることからとにかく着手すること、3.学生を運用に巻き込むことがポイントである。¹⁵

これまでの後方支援(資料収集・保管)とはまた違った立場での、学習支援・促進する環境へと変わりつつある。

資金不足・人的不足を補うのは、ひとえに図書館スタッフの創意工夫である。個人的には図書館スタッフも学生と一緒に楽しんでしまえる企画を創っていけばよいのだと考える。そういう意味で、個人的なモチベーションは高いと言える。

加えて、図書館に興味を持ってくれそうな学生の獲得も重要なポイントである。学生は、図書館スタッフに自分の名前を覚えられることは自分という人間を認識されていることと感じるのであるからだ。用がなくても学生の名前を呼んで、日々の挨拶をするよう心がけている。この声かけこそが、今回の研究テーマである『学生との協働』に重要な役割、ファシリテーターとしての学生の力量を見極めるのに大いに役立つのである。

また、フェリス女大でも、小規模大学という点について前出の著書で、次のように述べている。

¹⁴ 長崎ウエスレヤン大学自己点検評価報告書 2008

¹⁵ 情報の科学と技術 58 巻 7 号 341-346 2008 茂出木理子

－質疑応答のときに「フェリスという小規模大学の体力でこんな活動をやっていけるのか」という趣旨の質問がありました。そのとき私は「できることをやっている」と答えたのですが、大学の規模が小さければ小回りがきくし、学生一人一人にも目が届きます。一致団結するにはあまり大きな組織でない方がいい。だから、読書運動のような活動はむしろ小規模大学の特性を活かした活動といえると思います－

本学はフェリス女学院大学よりもさらに小規模大学である。ということは、より小規模大学の特性を活かすことが可能ではないか。逆に小規模大学であることが大きなメリットとなってくるのではと考えられる。それらを鑑みて先行大学図書館の事例を参考にしつつ、ぶっく倶楽部の学生とともに活路を開こうとした。

3.学生との協働による学生の読書環境の充実への取り組み実践報告

1) プログラム開発

先述したように、本学には、図書館サポートサークル「ぶっく倶楽部」がある。このぶっく倶楽部を利用してプログラム開発を試みた。

現在、ぶっく倶楽部のメンバーは20名である。実働部隊となると15～6名である。

ぶっく倶楽部メンバーから、図書館でアルバイトをしている学生がいることはすでに述べた。以前は、単に夜間の番人的な存在であったが、昨年からは学生に問題意識を持たせるようにした。

図書館利用者が求めていることを考えさせ、単に図書館の番人に終わらないよう課題を出し、それに対するフォローを心がけた。

基本的に志願制であるが、アルバイトという役割から図書館スタッフが指名することもある。彼らが中心となって、ファシリテーターとなり、他の学生への図書館利用を促進する。大学図書館の目標と学生のニーズギャップを埋めるのも、彼らの重要なミッションである。

2) 読書ボランティア養成事業

読書ボランティアと書いているが、正式には読書支援ボランティアである。ここでは、図書館サポートサークル「ぶっく倶楽部」がそれを担っている。図書館をサポートするという目的で作られたサークルなので基本的には、読書や図書館に深い興味をもっている学生たちで集まっている。読書への誘いは比較的スムーズであった。読書に関する事業は、学生たちとのミーティングによるものであり、当初は提案すらなかったが、回を重ねるごとに様々な企画が生まれた。以下は、読書支援ボランティアである学生たちから生まれた企画である。

・ランチタイムリーディング(以下LTRと表記)

ぶっく倶楽部の学生たちとで、ランチタイムに読書会をしようという企画案が出た。月 2 回程度で、ランチタイムに集まり、コーヒーを飲みながらカジュアルな読書会をしたいとの要望である。ただの井戸端会議的なものでもよくないので、テーマ決め、時間に余裕のある先生や学生に人気のある先生をゲストとして選定することにした。

メンバーの中から、読書リーダー(SA)として 6 名を選出し、その中より更にLTR担当者を決め、担当者がスケジュールを作成、準備する形をつくった。学生たちの履修状況により、火曜のランチタイムを固定とした。毎週は辛いという学生たちの要望をうけ、第 2、4 の火曜とした。

また、内容を読書に限定せず、広い範囲での参加を求めた。毎回、参加した学生には振り返り票の記入を義務付けした。

スケジュールは、初回は図書館スタッフが決め、フリートーキングとし、入学間もない学生のために、カリキュラムについて不明な点を上級生がアドバイスすることも含めた。新入学生の不安を取り除き、彼らの居場所を作りやすくしようと心がけた。

慣れてくるとその回の担当を決め、担当者が事前にテキストや資料を準備し、それに沿った読書会が可能になった。担当者によっては、作家の上映作品まで決めて、資料を読み解説があった後に上映会まで開催する回もあるようになった。

また、ランチタイムであるので、興味をもった教員も途中参加することもあり、学生たちのモチベーションも上がっていったようだ。

以下に、LTRのスケジュールを記した。

<LTR2010 年度プログラム>

*担当者は、教員・司書・学生である

回	開催月日	曜日	開催時間帯	参加	内容(テーマ)など	担当者
1	4月15日	木	11:30-13:30	9	図書館について フリーターキング(研究室ラリ一等)	植松
2	4月27日	火	12:30-13:30	11	図書館 井上真琴著「図書館に訊け！」	植松
3	5月11日	火	12:30-13:30	15	司馬遼太郎の世界 「果心居士の幻術」	濱田敏
4	5月25日	火	12:30-13:30	15	事前学習 鷲田小彌太著「やりたいことがわからないひとたちへ」を読む	植松
5	6月8日	火	12:30-13:30	12	泉鏡花著「外科室」 読書会と上映会 西山H	亘館長
6	6月22日	火	12:30-13:30	11	オグ・マンディーノ「ことばの魔術師からの贈り物」	高月
7	7月2日	金	12:30-13:30	11	山田詠美著「ぼくは勉強ができない」	山崎教授
8	7月8日	木	12:30-13:30	10	サキ短編集より	金原教授
9	10月12日	火	12:30-13:30	10	山田悠介著作	濱田敏
10	10月26日	火	12:30-13:30	6	宮部みゆき著作	濱田敏
11	11月9日	火	12:30-13:30	15	伊坂幸太郎著作	山口
12	11月30日	火	12:30-13:30	7	絲山秋子著作 「ばかもの」	南課長
13	12月6日	月	12:30-13:30	9	1Q84 村上春樹を読む	開先生
14	12月21日	火	12:30-13:30	9	現代のアニメを語る	濱田
15	1月25日	火	12:30-13:30	10	冬休みに読んだ本 一年間のまとめ	濱田

全部で15回実施。当初の予想を上回り、参加延べ総数は160名である。平均で10.6人が参加したことになる。授業との調整で苦勞した学生もいたが、初の試みであるLTRの運用に、努力した結果が現れたことになる。

LTRの様子



前期と変わって、後期からは図書館スタッフは殆ど LTR の会場に足を運ばなかった。学生の自主性を重んじたからだ。学生の読書リーダーは奮闘してくれた。なかなか集まらない人をどのようにしたら集められるか、メンバーで何度もミーティングを重ねた。学生たちは自分たちで考え戦略を練り、テーマを決めて報告するようになった。

・朝読書会(以下朝読と表記)

学生たちとのミーティングの中から発案された企画である。ひと頃「朝活」という言葉が巷で流行っていて、学生自身が朝活を体験してみたいということがきっかけで実施された。

当初、学生の希望で、試験期間中の朝の時間に図書館で読書(試験勉強も可能とした)をしようということで始まった。学生たちの目論見は、試験開始前に読書をしてモチベーションを上げようというものであった。加えて、読書を推進している図書館をサポートする意味もあった。

本学は前述したように高台にあり、朝は大学の送迎バスを使う学生が多い。大学までの走行時間

はおよそ5分。大学運行バスの始発が8時10分発であるので、8時15分には朝読が始まる。試験開始時間(始業時間)が8時50分なので、正味30分程度は読書が可能だ。

1回の期間を1週間と定め、合計6回実施した。LTRと違い、読む本は個人の好きなものとしたことも参加しやすい状況を作ったのではないだろうか。

結果は、下記のとおりである。

平均で6.2人の参加があったことは、予想外の結果で大きな収穫であった。

朝読集計 2010年-2011年

回数	実施月日	日数	人数	平均
1	7月29日(木)-8月9日(月)	8日間	71人	8.9人
2	10月4日(月)-10月8日(金)	5日間	43人	8.6人
3	10月18日(月)-10月21日(木)	4日間	17人	4.3人
4	11月1日(月)-11月4日(木)	3日間	12人	4人
5	12月1日(水)-12月7日(火)	5日間	23人	4.6人
6	2月8日(火)-2月16日(水)	6日間	26人	4.3人
計		31日間	192人	6.2人

朝読の様子



・「読書力」をつけるための講演会

私立大学図書館協会の助成を受け 2010 年6月5日(土)に、鷺田小彌太教授(札幌大学)¹⁶を招聘しての講演会が、本学西山ホールで実施された。鷺田教授は、「大学教授になる方法」という著書がベストセラーとなり、人生論や勉強法など多数の著作がある。

講演の内容は、「学生と読書－読書のある人生ない人生」である。国民読書年ということにも刺激され、読書による学生の社会的成長を促すものである。図書館スタッフが、鷺田教授の著作「本の定番ガイドブック」を読んで感銘を受け、直接アプローチした。鷺田教授(札幌在住)には、遠いところであるにも関わらず快諾いただき、西の果てまで来て頂いた。

参加者は、一般市民を合わせて約 150 名であり、著名な先生ということもあり学生をはじめ多くの教育関係者や図書館関係者も参加した。鷺田教授ご自身の体験談を交え、学生からの質問にも熱心にお答えいただき、非常に有意義な講演会であった。学生たちは、先生の体験談から、学習の基盤が「本を読むこと」であることを学んだ。

講演会には、「ぶっく倶楽部」の学生が 15 名ほどで講演会をサポートした。司会の打ち合わせから始まり受付もすべて、学生サポートによるものである。LTRの事前学習で、鷺田先生のプロフィールや本の内容を理解し、講演会を学生たち自身が運営した。おかげで我々図書館スタッフは客席でじっくりと講演を聞くことが可能となった。

会場から学生が熱心に鷺田教授に質問する場面もあった。



司会の打ち合わせに余念がない SA

¹⁶ 鷺田小彌太 札幌大学教授。哲学者



熱弁をふるう鷺田教授



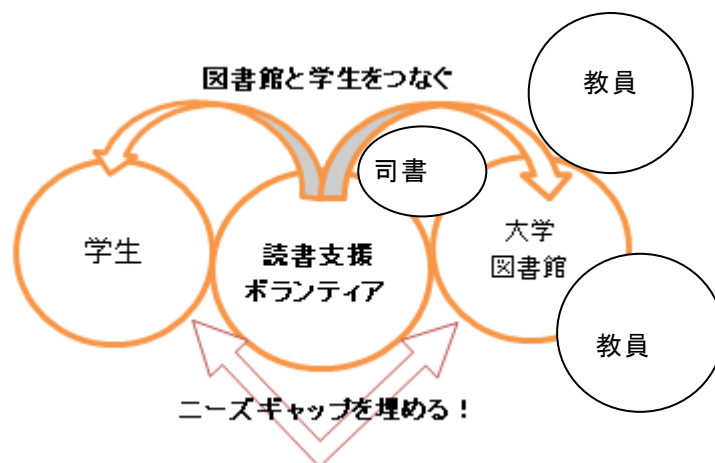
講演終了後、鷺田先生とスタッフとともに記念撮影

この講演会がきっかけに、ぶっく倶楽部部員が一致団結して、後の様々な活動が生み出されたといっても過言ではない。

(3) 課題と改善の方向性

これまで述べてきたように、ぶっく倶楽部を中心して、下記の図のような学びのコミュニテ

イモデルが形成されつつある。また、これまで「書庫」として使ってきた部屋を片付け、グループでの学習室として使えるように学生たちと知恵を絞り改善した。学生目線での様々な提案が、図書館の至る所で活用されている。これは、学生たちが自分たちの図書館としての自意識が芽生えてきたという証でもある。サービス機関として位置づけられている図書館が、学生たちの自発的な発想の下、大きなイノベーションの創造を可能にした。



おわりに

大学図書館と学生との協働による「学びのコミュニティ形成」

(1) 本研究により明らかになった課題と可能性

今回の研究を通して、カリキュラムとの連携や教務との連携、つまり全学的に取り組まないと今後の成果は得られないことを痛感した。大学では、読書というのは各種情報を蓄積するためのツールであり、読解力としてはすでに小中高で確立している事実として、大学教育が成り立っていると考えられてきた。だが、多様な学力の学生の出現により、それが不成立であることに気づかされたのである。小規模大学としてのこのような取組みは、コンパクトになりやすいが、反して学生への浸透は早い。

(2) 大学図書館と学生との協働による「学びのコミュニティ形成」

読書リーダーとなった学生は、入学してからこんなに読書したのは初めてだったという感想を述べている。SAとしての責務から、他学生への読書指南のためのPOP作成のための読書など、かなり鍛えられたのではないかと考えられる。このことは、図書館スタッフが機会あるごとに指示していたが、時間の経過とともに学生たち自ら考え、起案し、実施するようになった。

学生と教員のファシリテーターとして、図書館司書がおり、そのまたファシリテーターとして読書

リーダーの学生がいるといったような 2 段階の図が完成する。実際に、「朝読」は学生発案のもとに実施されたが、その結果を出すには、時期尚早である。本研究が目指した「学びのコミュニティ形成」のプログラム開発するためのひとつの視点からのアプローチに過ぎない。

大学図書館の学生への学習支援は、図書館スタッフの使命であるが、もう一つの緩衝材の役目として学生スタッフが必要であることを改めて認識した。

(3) 残された研究課題

沢山の学生から様々な提案を受け、大学図書館として可能なこと不可能なことを、ミーティングを重ねながら協議した。コミュニケーション不足と言われる学生たちだが、目標を一つにすると意外な発言があったり、これまでの自己満足であった図書館の取組みが全く浸透していなかったことなどの新しい発見があった。「学び」とは、「個」の活動であると信じていた世代の筆者であるが、学生たちは、共に学びあう姿勢というものを尊重している。図書館の利用促進の鍵は、図書館スタッフ主導でなく、「学生と協働」にある。

このプログラムが順調に広がりを見せ、図書館利用促進への有効な切り札となるには、もう少し時間の経過が必要だと考える。

また、司書課程がない大学だからこそ、「読書に興味がある学生の発掘が必要である。

ただの図書館利用者からSAとなる学生は、よほど高い意識を持たないとその変化に戸惑う。そのため、図書館利用者のニーズを把握するSAとなるための教育は、きちんとしなければならない。しかも、「図書館に興味を持つ学生の獲得」が前提なのである。司書課程がないと、「図書館へ興味を持つ学生の獲得」というのが難題である。

今後、継続的に、このような取組みを実施するためには、小規模大学であるがゆえに、図書館の内部力は非常に小さい。だからこそ、全学的に協力関係を推進していくことが課題となる。

最後に、視察に協力いただいた東京女子大学図書館の橋本課長、横浜フェリス女学院大学図書館の加藤課長に感謝申し上げます。また、図書館調査には、本学の占部准教授ほか学生たちが、多数協力してくれた。それ以外にも、佐藤快信教授や、全面的にサポートしてくれた南企画課長、同僚に、そして何よりもこの事例研究に協力してくれたぶっく倶楽部の学生たちに、紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

注・引用

1. 土持ゲーリー法一 読売新聞「論点」2011年1月5日付け
2. 長崎ウエスレヤン大学自己評価報告書 2008
3. 2005年からの大学全体の取組み。教材を配布し、レポートを課している。特に推薦・AO入試で合格した学生に対し実施。学習の習慣づけを行うことを目的としている。
4. 丸善ライブラリーニュース 復刊第4号「誰も来ない図書館」土屋俊

5. 平成 20 年中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」
6. カレントアウェアネス No. 289 2006 年 9 月 米澤誠
7. 同上 ACRL全国会議とは米国大学・研究図書館協会
8. IDE2009 年 5 月号 井上真琴
9. 2010 年 9 月西南学院大学 私立大学図書館協会講演会より
10. 大学ランキング 2011 年版 朝日新聞社
11. 同
12. 2002 年度よりフェリス女学院大学図書館で始まった読解能力向上を目的とする運動である。
13. 「いま、学生に求められるもの」ひつじ書房刊 2009 フェリス女学院大学附属図書館
14. 長崎ウエスレヤン大学自己点検評価報告書 2008
15. 情報の科学と技術 58 巻 7 号 341-346 2008 茂出木理子
16. 鷺田小彌太 札幌大学教授 哲学者 1942 年生。『大学教授になる方法』『定年と読書』ほか著書多数。

参考文献

- 図書館雑誌 208.11 橋本春美 「東京女子大学図書館における学生支援GP事業の展開」
 図書館雑誌 2008.2 大学図書館の現在 太田潔
 「図書館に訊け」井上真琴 ちくま新書 2004
 教育学術新聞 2408 号
 図 1 大学ランキング 2011 版 朝日新聞社
 大学の図書館 第 29 巻 7 号
 News Letter ブレインテック 2010.8
 カレントアウェアネス No.289 2006.9 「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援」 米澤誠
 IDE 現代の高等教育 2009.5 「学びのマネジメント」を支援する 井上真琴
 「いま、図書館に求められるもの-フェリス女学院大学の挑戦」2009
 図書館雑誌 2005.11
 別冊環 15 図書館・アーカイブズとは何か
 大学はなぜ必要か 2008.3 学術研究フォーラム
 IDE 現代の高等教育 2009.5 「中小規模私大の課題と戦略」井原徹
 「地方の小規模大学図書館の試み：長崎ウエスレヤン大学図書館の文化事業と今後の課題」
 西日本図書館学会 2008.12 植松久子
 図書館広報実践ハンドブック-広報戦略の全面展開を目指して-2002
 「読書と豊かな人間性」黒岩一夫ほか 2007
 「変わりゆく大学図書館」逸村裕ほか 2005
 図書館法規基準総覧第 2 版 p479
 「大学行政政策論」立命館大学大学行政研究・研修センター 近森節子 2011
 大阪工業大学紀要人文社会篇 第 48 巻 2 号 林正人
 私立大学図書館協会会報 135 号 2011.3